

音の日委員会の活動報告

音の日委員会 委員長
林 和喜 (株式会社 JVC ケンウッド)

皆様、あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。
音の日委員会の活動と、昨年 12 月 6 日に開催しました「音の日」のイベントについてご報告いたします。

1. 音の日委員会の活動報告

2018 年 6 月 22 日に今年度の新体制が発足し、「音の日委員会」の委員長を拝命いたしました。この委員会の運営に際し、「音の日」の設置主旨、運営の歴史について理解するとともに、現在の課題について関係の皆様にはヒアリングを行い、今年度の運営について方針を 9 月 13 日理事会において報告を行いました。

1) 「音の日」制定の主旨

1877 年 12 月 6 日はトーマス・エジソンが世界初、音の記録、再生可能な装置、錫箔円筒式蓄音機「フォノグラフ」を発明した日であり、オーディオの誕生日という記念すべき日として 1994 年に制定されました。「日本オーディオ協会、日本レコード協会、並びに日本音楽スタジオ協会は、より多くの人々に、音と音楽文化の重要性を広く認識してもらうと共に、オーディオ文化、及び音楽文化・産業の一層の発展に寄与することを目的に、12 月 6 日を「音の日」として制定する」が制定の主旨であります。

2) 2018 年度「音の日委員会」の課題認識

音の日にちなんで行われている記念事業の中で「音の匠」の顕彰等、事業内容の見直しと低認知度への課題が指摘されています。対応として関係団体との整合性を取る必要もあり、組織内で設置目的及び内容を議論することから始めるという課題を認識し、日本オーディオ協会としての音の日委員会活動を推進して参ります。

3) 「音の匠」制度の定義

「日本オーディオ協会は、ビジョン及び定款に掲げる目標を達成するために、音及び音楽の分野に於いてそれを表現する仕組みを自ら創り、若しくは復活再生し、その仕組みを十二分に活用して、オーディオ文化、及び音楽文化、並びにそれらに類する文化創造や社会貢献できる卓越した能力を持ち、実践している人、若しくは組織を「音の日」に因んで「音の匠」として顕彰する。」と定義しております。

4) 「音の日・功労賞」の定義

「日本オーディオ協会は、ビジョン及び定款に掲げる目標を達成するために、音及び音楽の分野において、それを表現する既にある仕組みに独自の創造を加え、その仕組みを十二分に活

用し、オーディオ文化、及び音楽文化、並びにそれらに類する文化創造や社会に貢献した人、若しくは組織を「音の日」に因んで、その労苦に感謝をし「音の日・功労賞」として顕彰する。」と定義しております。

5) 「音の匠」顕彰について

① 「音の匠」顕彰は、過去 22 回継続している「伝統と価値ある賞」であることから、この継続性は重要であること。

② 貢献ジャンル別の受賞数は、「音の文化・社会貢献」が 15 テーマと一番多く、次いで「音楽業界への貢献」は 10 テーマ、「オーディオ業界への貢献」は僅か 3 件であること。

③ 社会への認知は、日本オーディオ協会の Web やジャーナルはもちろん、業界紙である「電波新聞」「電化新聞」に加え「Phileweb」等で広報されています。一方で一般紙や放送の扱いはないため、今後広く認知する活動が必要であること。

これらを踏まえながら、継続して参りたいと考えております。

6) 「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」について

今後の業界の発展を担って行くであろう「若い世代への啓発」と、オーディオの原点である「原音」を高い品質で「録音」「再生」する、普遍的な入力の技術領域である「録音技術」の継承と発展という目的の為に、継続して実施してまいります。

7) 平成 30 年度の「音の匠」について

近年アナログレコードおよびアナログプレーヤーが、若者を中心に注目されておりオーディオ業界の復活につながっている事、また 2018 年が LP レコードは誕生 70 周年という節目(1948 年にコロンビアが LP レコード、1949 年に RCA ビクターが EP レコードを開発)であることから、「音の匠」顕彰は、「レコードおよびレコード針の周辺技術に、長年にわたって貢献された方」を対象とすることに致しました。

8) 委員会メンバー

今年度の委員会メンバーは、来年度のための準備委員会として少人数で構成し、本年度の音の日の準備及び来年度の検討のための方針決定、および来年度の運営を進めるために必要な新たなメンバーの選定を行うこととします。

委員長 林 和喜 (JAS 理事、(株) JVC ケンウッド)

委員 齊藤 靖之 ((株) JVC ケンウッド)

委員 森 美裕 (JAS 専務理事)

委員 照井 和彦 (JAS 事務局長)

委員(事務局) 村松 俊次 (JAS)

2. 「音の日記念行事」の実施報告

1) 「音の日記念行事」について

例年通り、12月6日(水)ホテル雅叙園東京(目黒)において、共催：日本レコード協会、日本音楽スタジオ協会、日本ミキサー協会、演奏家権利処理合同機構で実施致しました。

2) プログラム

(1) 学生の制作する音楽録音作品コンテスト授賞式

日本オーディオ協会は、音楽録教育の重要性を認識し、その啓発に取り組んでおります。毎年「音の日」に、「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」を実施し、優秀な作品を制作した学生に対して表彰を行っております。5回目となる今年は、9校から27の応募作品が集まり、益々規模が拡大しております。今回、コンテストへご協力頂きました審査委員先生は以下の方々です。

- ・東京藝術大学音楽学部教授 及び、洗足学園音楽大教授客員教授 亀川 徹様
- ・日本工学院専門学校ミュージックカレッジ音響芸術科 学科長 我妻 拓様
- ・洗足学園音楽大客員教授及び dream window inc. 代表 深田 晃様
- ・日本大学芸術学部放送学科非常勤講師 及び、Audio Engineering Society 日本支部 上埜 嘉雄様
- ・音響芸術専門学校 教務 永井 秀文様
- ・日本オーディオ協会 諮問委員及び、CS ポート株式会社 技術顧問 高松 重治様
- ・日本オーディオ協会 諮問委員 千葉 精一様
- ・名古屋芸術大学 長江 和哉様
- ・尚美学園大学 柿崎 景二様

各賞の受賞者の方は、

➤ 「最優秀賞」

名古屋芸術大学(2018年3月卒業)の山下 真澄(ヤマシタ マスミ)さん
作品名「for(art)est」6ch 44.1kHz 24bit

➤ 「優秀企画賞」

日本工学院専門学校ミュージックカレッジ音響芸術科2年の岡澤 朝輝さん、小形 花菜子さん、飯塚 菜央さん、岩坪 拓弥さん、櫛田 優理さん、永井 隆陸さん
作品名「戸塚 WINDS レコーディング」5.1ch 48kHz 24bit

➤ 「優秀音楽作品賞」

日本工学院専門学校ミュージックカレッジ音響芸術科1年の横田 創平さん
作品名「レイトショーの後に咲く花」2ch 48kHz 24bit

➤ 「優秀録音技術賞」

九州大学 芸術工学部音響設計学科4年の加藤 拓さん
作品名は、「Flying in future」2ch 44.1kHz 16bit

各賞の代表4名の方に、小川会長から表彰状と副賞の授与が行われました。

「for(art)est」では、自然と人工物との融合というテーマで「音のインスタレーション」を高い芸術性で表現された作品でした。

「戸塚 WINDS レコーディング」では戸塚高校のブラスバンドを「1 発録り」で成功させるべく、楽譜を見ながら、セッティング表で配置を決めた「設計」により指揮者の位置での録音を感じることが出来ました。

「レイトショーの後に咲く花」では、ボーカルが生きておりメッセージが良く伝わりました。授賞式で横田さんの感涙に心を動かされました。

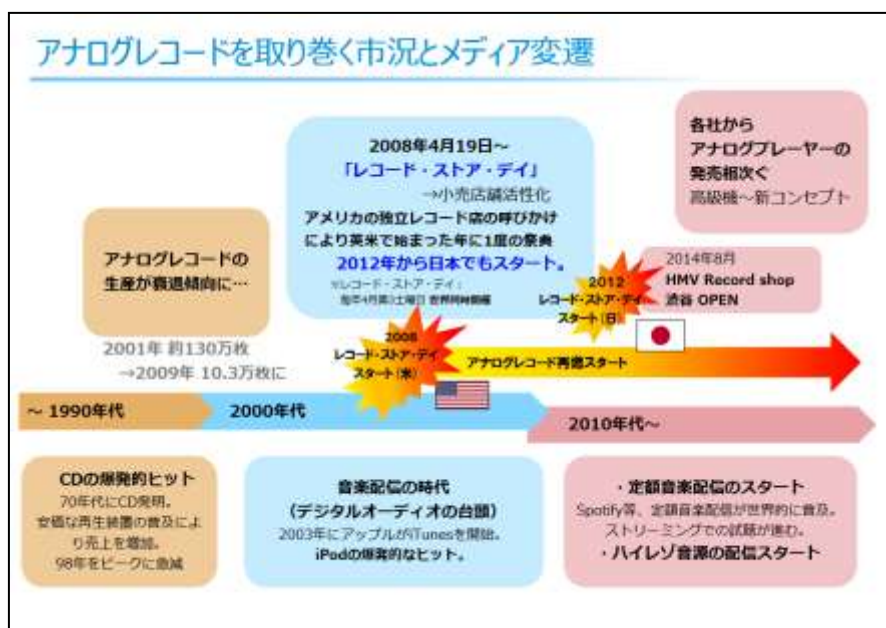
「Flying in future」では、軽快なライブ感やダンサブルな楽曲ですが、制作時にはアーティストの心と体のマネジメントに配慮されたとのコメントも印象的でした。

総じて、学生の皆さんの作品のレベルは高く、先生方は選定に大変苦勞されたとの事です。受賞の皆様、誠にありがとうございました。今後のご活躍を期待しております。

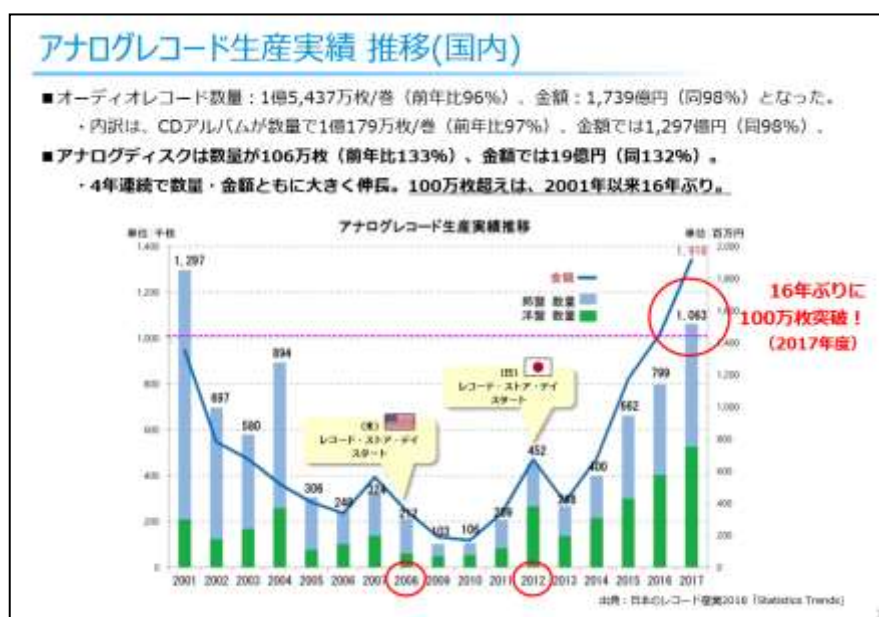


(2) 「音の匠」顕彰式

日本オーディオ協会は、12月6日の「音の日」にちなみ、「音、音楽、オーディオ」などを通して、文化創造や社会貢献に卓越した能力を持ち、実践している個人、もしくは組織を、これまで「音の匠」として顕彰してまいりました。今回、「音の匠」を選出するにあたり、近年のアナログレコードおよびアナログプレーヤーが若者を中心に注目されており、オーディオ業界の復活につながっている事から、アナログレコードの市況と、その魅力について整理いたしました。



まずアナログレコードの市況と変遷ですが、90年代までのCDの爆発的ヒットや、2000年代の音楽配信の台頭により2001年に国内130万枚あった市場は2009年には10万枚に縮小しました。一方で2008年アメリカの独立系レコード店の呼びかけにより始まった「レコード・ストア・デイ」からアナログレコードが再燃したとされています。



昨年、アナログレコードの国内生産は106万枚（前年比133%）と4年連続で数量・金額とも大きく伸張し、100万枚超えは16年ぶりとなります。

アナログレコードの魅力

■音の「違い」を楽しむ（変わる楽しさ。変える楽しさ。）

- ・デジタルは音が均質化してしまい、面白みが少ない。
- ・同じ音源でもマスターの種類やプレスした国で音が違う。（輸入盤など）
- ・プレーヤーやカートリッジで劇的に音が変わる。
- ・機器のカスタマイズやシステム構成により、「好みの音」に追い込んでいく楽しさがある。

■音楽を「視覚」で楽しむ（モノとして、存在が楽しい。）

- ・「音楽が目に見える」。視覚でも楽しめる要素が多く、それが魅力である。
- ・盤に刻まれた音溝は音の振幅そのもの。振動（音）を拾う針の微妙な動きも目で追える。
- ・高いインテリア性、ファッション性。（飾るためだけに買う人も多数存在）
- ・アートとして、コレクションとして、所有する実感が得られる。（配信音源には無い魅力）

■“手間”を「イベント」として楽しむ（趣味性の高い、価値ある時間）

- ・音楽を聴くまでの所作そのものを楽しむ。（コーヒーの淹れ方に似た趣味性）
- ・A面からB面へとひっくり返すような“手間”
= 「デジタル世代」にとってはライブやフェスに参加するような「非日常体験」と映る。
- ・CDや音楽配信では存在しないレコード（音源）を中古で発掘する楽しさ。
- ・膨大な商品群の中から、好きな作品を探す面白み。

では、何故アナログレコードが若い世代の魅力となっているのかについて調べてみますと、「音の違いを楽しむ」、「音楽を視覚で楽しむ」、「手間を楽しむ」といった、デジタルに慣れ親しんでいる若年層にとって、アナログレコードは「目新しいカルチャー」となり、アートの匂いを感じる「トレンドアイテム」のひとつとして映っているようです。日本オーディオ協会としては、このトレンドは、若い世代へオーディオ文化を広げて行くという「新体制の考え」と一致するところであります。

今年は1948年6月21日にCBS研究所と米コロムビアによりLPレコードが誕生した年から70周年の節目にあたることから、平成30年度「音の日委員会」で審議した結果、一時期の苦境を乗り越え、アナログレコード盤に関連する4つの分野、「ラッカー盤」、「レコードカッティング」、「レコードプレス」、「レコード再生針」において長年にわたって貢献され方から「音の匠」を選出することに決定いたしました。

それでは「音の匠」受賞の方をご紹介します。

➤ ラッカー盤 分野「音の匠」 1名

金型に溝を転写する用途で、音を最初に溝として記録するディスクが「アナログレコード・マスター盤」これがラッカー盤と呼ばれるもので、現在製造を手掛けるのは世界中で2社、国内で1社です。

パブリックレコード株式会社 代表取締役 奥田 憲一様

➤ レコードカッティング分野「音の匠」 6名

スタジオで制作されたマスター音源をラッカー盤へ音溝として刻み込む作業は、専用のカッティングレースを駆使した長年の経験による正確な作業と、音楽への高い理解力が必要です。

株式会社 JVC ケンウッド・クリエイティブメディア 小鐵 徹様
株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ 堀内 寿哉様
東洋化成株式会社 手塚 和巳様
東洋化成株式会社 西谷 俊介様
日本コロムビア株式会社 武沢 茂様
株式会社ミキサーズラボ 北村 勝敏様

- レコードプレス 分野 音の匠 2名
アナログレコード盤は、音溝がカッティングされたラッカー盤から A 面 B 面二つの金属原盤を起し、それをプレス機に装着して、塩化ビニール製の 12 インチや 7 インチのディスクが製造されます。

株式会社ソニーDADC ジャパン 代表取締役 石原 浩一様
東洋化成株式会社 代表取締役社長 萩原 克治様

- レコード再生針 分野 音の匠 4名
アダマンド並木精密宝石株式会社 代表取締役社長 並木 章二様
オグラ宝石精機工業株式会社 代表取締役社長 小倉 教太郎様
日本精機宝石工業株式会社 代表取締役社長 仲川 和志様
株式会社ナガオカ 代表取締役 長岡 香江様

以上 13 名の方に小川会長より、「音の匠」の盾と副賞が贈られました。そして平成 30 年度音の匠を代表してパブリックレコード株式会社代表取締役 奥田 憲一様より、受賞のご挨拶を頂きました。





受賞の皆様、誠におめでとうございます。今後も後進の育成をよろしくお願いいたします。

(3) 音の日 特別講演：「菅原 正二さん 小川 理子会長対談 JAZZ とオーディオを語る」



今回、小川会長のご推挙により菅原 正二様と小川会長の対談が実現いたしました。菅原正二様は、1942年岩手県一関生まれ。1964年早稲田大学入学、早稲田大学ハイ・ソサエティ・オーケストラのドラムパート担当で、バンドマスター。TBS主催大橋巨泉司会による「大学対抗バンド合戦」で同オーケストラ3年連続全国優勝。このころ荻窪に下宿し、浅沼 肇氏宅に頻繁に出入り。1967年ビッグバンドとして、日本初の米国ツアーを敢行し大好評を博す。翌1968年早稲田大学卒業チャーリー石黒と東京パンチョスのドラマーとして活躍。1970年東京パンチョスを退団し、一関に戻る。そしてジャズ喫茶「ベイシー」開店され、今日に至ります。

対談では、お2人の音楽との出会いのエピソードや、JAZZに傾倒していったきっかけなど、大変興味深く、楽しいお話を頂きました。

小川会長の音楽との出会いは、胎教から始まり、チェリルダッケ ミュンヘンフィルのピアノシモをコンサートで聴いたことから始まったこと、菅原様の音楽との出会いは、蓄音機との出会いからであったことなど、改めて、音楽との出会いが、その後のオーディオに関わる人生に影響していることに気づかされました。

また、中盤、菅原様のハイ・ソサエティ・オーケストラの先輩である浅沼 肇様も登壇され、カウント・ベイシーにまつわる話を披露され、非常に興味深い話をされました。菅原さんの飾らない人柄、音楽に対する終わる事がない探究心、未だ老後ではないという言葉、そして菅原さんの存在や生き方がJazzであると感じました。



ベイシー店内のターンテーブル周りの様子。今でも常に調整されているとのこと。

(4) 功労賞授与式

日本オーディオ協会では、協会の活動またオーディオ業界の発展に大きな貢献をされた方に対して、日本オーディオ協会功労賞を授与してきました。

本年度につきましては、穴澤 健明様に、平成 30 年度日本オーディオ協会特別功労賞を授与することとなりました。

穴澤氏は日本オーディオ協会理事を平成 16 年から 10 年にわたり務められ、理事退任後もソフト委員会、JAS ジャーナル編集委員会、音の日委員会、良い音委員会等を長年にわたり務められました。特にこの間、所属会社において PCM デジタル録音装置の実用化等今日のデジタルオーディオの先駆けを務めてこられました。

一方、日本オーディオ協会のテストレコード・CD 及びハイクオリティ音源の制作に寄与され、さらに音の日委員会副委員長として「学生による録音コンテスト」を立ち上げ、後輩の育成に努められた他、国立科学博物館の技術遺産として「アナログディスクレコード技術の系統化報告と現存資料の状況」として残されるなどオーディオ業界に多大な足跡を残すなど大きな貢献をされました。



(5) 「音の日のつどい」パーティー

すべてのイベント終了後、日本音楽スタジオ協会、日本ミキサー協会、日本レコード協会、演奏家権利処理合同機構 MPN および日本オーディオ協会の共催で、「音の日のつどい」パーティーを会員および関係者など総勢 130 名あまりの方に出席いただき、盛大に執り行われました。冒頭、小川会長の挨拶の後、音の匠として顕彰された方、学生の制作する音楽録音作品コンテスト受賞者の方、また、同時開催の第 25 回日本音楽録音賞の受賞者の方の紹介の後、日本レコード協会の畑理事の発声により乾杯を行い、皆さん、ご歓談されていました。

一般社団法人 日本音楽スタジオ協会 第 25 回日本プロ音楽録音賞運営委員長 内沼様の中締めの後、閉会となりましたが、若い方の参加も多く、世代を超えて、交流されるなど、「音の日」にふさわしいパーティーでした。

3. おわりに

新体制の「音の日」の記念行事を無事終えることができ、大変安堵しております。不慣れな点がございました事、この場を借りてお詫びいたします。来年の「音の日」の記念行事へ向けて、皆様方のご意見・ご要望を頂きながら新たな気持ちで取り組んで参りたいと思えます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

■執筆者プロフィール

林 和喜（はやし かずよし）

1962 年、東京生まれ。

